
恋愛競走 いつまでもキミと

梶原ちな

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

恋愛競走 いつまでもキミと

【Nコード】

N7792C

【作者名】

梶原ちな

【あらすじ】

あたしをおかしくさせるのは、幼なじみのあいつ。そんなアタリ
マエでいつもどおりの日々だったのに、どうして。

第1話 委員長の憂鬱（前書き）

短期連載になります。

最後まで読んでいただければ幸いです。

第1話 委員長の憂鬱

こんなセイカツが、アタリマエになっていた。

七校時終了の鐘の音が、教室を揺らす。

黒板の前に立つ先生の手が止まって、その目があたしを見た。
アイコンタクト。終了の、合図。

「起立」

つかえることなく、慣れたセリフが口をついて出た。

あたしの声で一齐に立ち上がる制服の群れ、クラスメイト。

その中でも、ひときわ目を引くあの背中。

ヤツの背中目がけて、声を発した。

「礼」

頭を下げたのか下げないのか、確認するまもなくざわめき立つ教室。

これからホームルームがあるというのに、今や教室の雰囲気は校外に向かっている。

委員長なんて、ホントに楽しくない。

号令なんて日課。

浮き足立った思春期という青春を謳歌しているワカモノたちを静めるのも、役目。

毎日のアタリマエなこと。
タイミングも距離のとり方もなんとなくわかってしまっているから、
慣れとは恐ろしい。

「起立」

教科担任と入れ違いに入ってきたクラス担任の姿を見て、本日何
度目になるか分からない号令をかける。

あたしという名の、鶴の一声でクラスに多少の沈黙がもたらされ
て、そして放課後へ。

ホームルームをあっさりと終えて、また号令で今日が終わる。
まるで自分が時報ように思えてしまう。

「いいんちよー、じゃね！」

「また明日」

アタリマエのようにあたしのアダ名は委員長だった。

昔からそうだったし、自分でもクラス委員という役柄は合ってい
ると思う。

つねに冷静であれ。

公平に、平等に。

人をまとめるのは大変だけれど、クラスの協力があれば何とかな
るものだ。

しかし。

唯一の例外が、ただひとり。

「ゆーい！ ゆいゆい」

あたしを乱す、バカみたいな声。
狭い教室を走り寄ってくるヤツだけはどうしても。

「うっさい！ このバカ」

「結依は俺にだけ冷たいよなー。あ、わかった」

腕を組んで、仁王立ちをして。

対ヤツの攻撃に備える。

「……なによ」

あたしがあたしでなくなる原因。

困り果てた男。

バカのバカみたいな、声。

「はずかしーんだろ。まったくよー、かわいい幼なじみだぜ」

そして、あたしの沸点はヤツの発言でピークへ達する。

「ば、つかじゃないの!？」

冷静なあたしはどこへやら。

幼なじみの彼のせいで、あたしはいつものようにあたしではなくなってしまうのだった。

第2話 彼と彼女とその関係

あたしとヤツの関係をヒトコトで表せば。
それはたんなる『幼なじみ』にすぎない。
はず、だったのに。

「夫婦ゲンカはよそでやれよな」
「たいちゃん、負けんな！」

大声ひとつで、放課後の教室がこれだけ盛り上がるのはどうしてなのか。

さっきまで団結したのかと思うほど早く帰らせるオーラを放っていたくせに、男女関係となるとこのクラスは本当にやかましい。

しかも、なぜかヤツの味方。
クラスにあたしの味方なんてひとりもいやしない。

「おうよ！ これくらいで俺がめげると思っか」

バカのバカみみたいな声が、ギャラリを煽る。
調子にのってこぶしを突き上げるパフォーマンスをしているヤツの、足を思いつきり踏んでやった。

踏むだけじゃ足りなくて、そのままかかとをひねって押しつける。
とたんに上がったオーバーな悲鳴に、ますます怒りは増大した。

「ゆ、」

「アンタが悪いの。分かってるでしょ」

まるで犬のような彼。

あたしが飼主ならば、現在シツケ真っ只中。

しつぽがあるのならば、きつといまは下を向いていることだろう。

「で、何の用？」

縮む音が聞こえるかと思うほどおとなしくなってしまった彼を見上げて、腕を組んだまま話しかける。

小さい頃は同じくらいだった身長が、今や見る影もない。

腕を組んで話すのは、せめて態度の大きさを対抗しようとするあたしの小さなプライドだ。

話しかけられて再びテンションが急上昇したらしい彼は、目を光らせてこちらを見る。

あるはずのないはずのしつぽが左右に大きく揺れているような気がした。

「ゆい、今日委員会だろ？ 俺、先帰るから」

思わず息を飲んだ。

彼の言葉の意味が、脳内で上手く変換できずに耳から抜けてしま
う。

「……え」

反応が遅れて、それを取り繕うこともできないまま、疑問符は声
となって形をなす。

先に、帰る。
いま、そう聞こえた。

約束なんてしていないけれど、あたしたちは子どもの頃から一緒に帰るのがアタリマエになっていた。

委員長という堅苦しい役職についてから、帰宅時間は遅くなる一方。

なのに、忠犬八子公よろしく彼はいつまでもあたしを待ち続けていた。

たまに例外はあるにせよ、あたしが委員会るときは必ず一緒に帰っていたのに。

「ごめんな」

彼の手が、髪に触れた。

とたんに、体内温度計がくるいだす。

いつからだろう。

いつから、こんな風になってしまったんだろう。

あたしたちはただの幼なじみで、あたしは彼よりも勝っていた。そうでなければいけなかった。

音を立てて跳ね返る心臓は、つくろった表情を崩してしまう。

あたしがあたしでなくなる瞬間。

頬が、異常な熱を発した。

「い、つまで触ってんのよ！ あたしだって子どもじゃないんだし、

一人で帰れるわ。それにどうせ夜に来るんでしょ」

乾いた音をたてて、払いのけた手。
ひどいうずきをともなつて、痛む胸。

一緒に帰れないくらいがなんだ。
そもそも、ずっと一緒に帰っていたことがおかしいのであって、
これが正常なのだから。

待たれていることが、うざったいと思った日もあった。
ケンカしたときもあった。
こんな風に、胸が痛む理由なんてないはずだ。

それに、彼とあたしの家はお隣で、彼はいつもあたしの家で食事を
する。

一生、会えないわけじゃないのに。

「今日はエビチリだっておかーさんがいったから、早く帰ってこ
いよ」

胸の痛みから一転。

ヤツの吐いた言葉に思わず固まる。

「なんで、メニュー知ってるの……?」

「ゆいのおかーさんとメールしてたから。だって俺たちメル友だも
ん」

「ば、」

本日二度目の大声。

出席した委員会で、今日も大変だったねと先輩に笑われてしまっ

恋愛競走 いつまでもキミと

た。

第3話 不変的日常の終結

心細いかと聞かれれば。

それはあたしだってそうだと首を縦に振らざるを得ない。

日が暮れるスピードが加速して、気がつけばあたりは暗くなっている。

目が泳ぐのは、気のせいだ。

隣が寒いと感じるのは気のせいだ。

静か過ぎる帰り道が、きつとこんなにもあたしをセンチメンタルにさせているんだ。

そつに、違いない。

駆け足で帰宅すれば、すっかり息が上がっていた。

それが無性に腹立たしくて、玄関の前で深呼吸を繰り返す。

整った呼吸を確認して玄関のドアを開けば、ヤツのいったとおりエビチリのいいにおいがした。

「ただいま」

「あら、お帰り。泰斗くんといっしょじゃないの？」

「え？ 先に帰ってきてるんじゃないの」

エプロン姿の母が、ぬれた手を拭いながら顔を出す。

その口から泰斗の名前が出て、一瞬戸惑った。

いない？

てつきり先に帰ったものだと思ってたのに。

「結依、あんた泰斗ちゃんとケンカでもしたの？ めずらしいじゃない、ひとりで帰ってくるなんて」

「してないわよ。今日だって、いつもどおり……」

いつもどおりだった。

アタリマエの日常だった。

泰斗があたしを置いて帰るといった以外には。

「ばかねえ。とうとう愛想つかれたんじゃないの？ あんたがいつまでたっても素直じゃないから」

あきれたように、つぶやいた母の一言。

突き刺さった、コトバの破片。

愛想つかれた？

そんなの、考えたこともなかった。

素直じゃない？

だって、それがあたしだもの。

ただでさえ、ヤツには振り回されて迷惑していた。

あたしという委員長気質を乱されて、頭にきていた。

アイツにだけは負けない。

そのプライドだって崩されて。

被害者はあたしだと、そう思っていた。

なのに。

なんで、こんなに動揺しているんだろう。

「たっだいまー！ あ、違った、こんばんみー」

ぐちゃぐちゃと掻き乱される思考の渦を裂くドアを開ける音。
立ち尽くすあたしの髪が揺れて、目の前の母の顔がほころんだ。

後ろで聞こえたバカのパカみみたいな声。

苛立ちとなぜか安心がわいて起こる。

「泰斗くん、ごはんできてるわよ」

あたしと話すときとは違う、可愛らしい声を発した母はそのまま
居間に姿を消した。

食事の支度をしに行ったのだろう。

「ゆい？ 何で玄関に突っ立ってんだよ？」

背後で靴を脱ぐ音がして。

泰斗のいつもどおりの声がして。

アタリマエのように名前を呼ばれた。

その声に振り向くことも、返事をすることもできなかった。

先に家に入った彼は、突っ立ったままのあたしに手を差し出す。

「ほら、メシにしよーぜ。俺、もう腹へってさあ」

「アンタ、今日何してたの。ずいぶん遅かったじゃない」

自分で思ったより低い声が出た。
差し出された手を無視して、正面の彼を見据える。

「ん、何か怒ってるの？ トモダチと遊んでただけだぜ？」

不思議そうな、彼の顔。

けれど、差し出されていた手が一瞬震えたのを、あたしは見逃さなかつた。

「……あ、そ。先行っててよ、手洗ってから行くから」

平然なフリをした。

だって、こんなのあたしらしくない。

彼の足音が離れていって。

胸に沈む重みに耐えかねて息をついた。

なんで、こんな気持ちにならなきゃいけないんだろう。

泰斗はきつと、うそをついた。

あのバカ正直なアイツが、平気な顔をして。

それが、なんでこんなに苦しいの。

靴を脱ごうとして、体のバランスが崩れた。

前に傾いて、あわてて体勢を戻す。

「なんで、あたしが、」

こんなに動揺しなくちゃいけないの。

なのに、雑巾を絞られるみたいに胸がいたい。

アタリマエがアタリマエでなくなる。
そんなのアタリマエのことだ。
ずっと同じでなんていられない。

「ゆいー！ まだかよ」

居間から聞こえた泰斗の声。

これが聞きけなくなる時が、いつか来るのだろうか。

第4話 小さなベッドの大きな戦い

いつもどおりの食卓。

にぎやかな食事の席で、あたしだけ上の空。

ひとりだけ、ぼつんと影を落としているみたいなお気分だ。

なんで、あたしが悩まなくちゃいけないの。

「勉強してくる」

早々に食事を済ませ、いちばんに席を立って二階に上がる。

勉強しなければならないのは本当だけど、これではきつと身が入らないだろう。

部屋に戻って、電気のスイッチを入れた。

一瞬にして部屋は明るさを取り戻したのに、あたしは影を背負ったままだ。

ベッドに腰を下ろして、そのまま横になった。

制服がしわになってしまおうとも、もうそんなのはどうでもよかった。

「はあ」

ため息が蛍光灯に当たって消える。

なんなの、イライラする。

あたしらしくない。

トモダチと遊んだっていい。

そもそも泰斗はあたしのものじゃないんだし、一日中べったりされていても迷惑なだけだ。

(だけど、なんでこんなに帰りが遅いのよ。しかもウソついたっばいし)

母のいう通り、こんなあたしに愛想をつかしてもおかしくはない。なぐつたり、怒つたり、ちつとも可愛くないし、あたしを好きでいる理由どこにも見当たらない。

(だけど、なんでこんなに胸がくるしいの)

ずっと一緒になんていられない。

ずっと好きでなんていられるわけがない。

(そんなの、わかってる)

自分との葛藤に、ますます深みに入ってしまった気がした。情けない。

横になっていた体勢を変えて仰向けになる。

まぶしすぎる天井を見上げた、そのとき。

「ゆーいー?」

ノックも何もなしに開かれたドア。

あたしの悩みの原因が、立っていた。

「なっ、ノックくらいしなさいよ、バカ」

反射的に体を起こした。
うつかりしてしまった。

こんな、いかにも悩んでますみたいな姿、見せるわけにはいかなかったのに。

「今日、なんかしたか？」

「はあ？」

ドアを閉めて、勝手に部屋に入ってきたヤツは真剣な顔をしてベッドに近づいてくる。

全部アンタのせいよ、と叫んでやりたいくらいだったけど、ぐつと堪えた。

「元気、ない。どうしたんだよ」

泰斗が一步一步足を進めるたびに、鼓動が跳ね上がるのを感じた。
この雰囲気は、なに？

あたしが作り出してしまったのだろうか。

しおらしい彼の態度に、少しだけ申し訳ない気持ちになる。
もしかしたら、雰囲気に酔っているのかもしれない。

「へ、へーき。ちょっと疲れただけ」

「うそつけ」

うわずった声が、平気じゃないことを証明してしまって、取り繕うこともできない。

ベッドに座るあたしを覆う、彼の影。

いつのまにか泰斗はあたしの目の前にいた。

「俺に、隠せると思うなよ」

彼の膝が、ベッドにのって軋む音が響いた。

この体勢がいかにもずいものなのか、気づいた時にはもう時すでに遅し。

あたしのカラダはまたもや強制的に仰向けに。

ただ、さつきとちがって見えたのは天井でも蛍光灯でもなく、泰斗の顔。

真上に彼。

顔の横に彼のてのひら。

押さえつけられた、肩。

「ちょ、」

ベッドにはりつけにされてしまったあたしになす術などなく。

一瞬にして上昇した体温と破裂寸前の心臓のせいで顔が赤くなっているのは必死。

「言えよ」

「ば、ばかじゃないの!? ちょっと離してよ、何なのよアンタは!」

「前も言っただろ、あんまり俺をなめんなって。力でかなうわけないだろ」

体を起こそうともがいても、押さえつけられた肩がいうことをきかない。

力ではもうかなわない。

力だけじゃなくて、もう泰斗にはかなわない。
そんなの、分かっている。
いわれなくなたって、重々承知していた。

くやしい。

そう思ったら、もう止まらなかった。

「ゆ、」

こぼれた涙に、相当驚いたのだろう。

泰斗の目が、大きく見開かれた。

ふいにゆるんだ腕の力に、あたしは全身全霊の力を込めてこぶしを振り上げた。

コブシがお腹に食い込んだ感触と、上から漏れた声。

あたしのボディーパープローはあっさり決まって、体勢を崩した彼の下から何とかはいずれ出ることになった。

「ざまあみなさい！ まだまだアンタには負けないんだから」

精一杯の捨てゼリフを吐いて、部屋を飛び出した。

階段を駆け下りたときにこぼれてしまった涙を腕で拭えば、なぜか砂がついていた。

細かい粒が顔に擦れて、どこかがひりひりした。

第5話 張りつめた予防線

昨夜、さすがにあたしのボディーパーカーが効いたのか、泰斗はあたしを追っては来なかった。

翌朝、先に出てやるうと意気込んで早起きしたのに食卓に顔を出せば。

「よう、ずいぶんと早起きだな。あ、おかーさんみそ汁おかわり！」

いつもギリギリなヤツが、我が家の朝ごはんを食べていた。

いつもどおりの登校風景。

となりの泰斗はうるさいくらいしゃべるし、笑う。気をつかっているのがバレバレだ。

少しでも笑ってあげようと思うのに、どうしてもうまくできない。あたしはそもそも演技派ではないのだ。

これまで困ったことや落ち込んだことがあってもなんとかうまくやってきたのに、今回に限ってはさっぱりだ。

「ゆい」

「なに？」

呆けていたところで声をかけられた。
となりを歩いていたはずの彼はいつの間にかその歩みを止めていたらしく、少し後ろで立ち止まっていた。

「ごめん」

その言葉と同時に頭を下げた彼に、あたしの足は急停止した。

「ちょ、なに？　なんで頭下げるの」

「だって、俺が悪いんだろ。昨日からお前おかしいじゃねーか」

たしかに。

原因は泰斗にあるけれど、別にここまでして謝ってほしいわけじゃない。

(放課後、どこにいったの)

胸がいたい。

(あたしに愛想つかしたの)

彼の目が、あたしを見る。

吐き出してしまうたい想いはあふれかえるようで、だけど口には出せない。

それじゃあ、認めてしまったも同然になってしまふ。

「泰斗のせいじゃないから、気にしないで。あと」

「あと？」

「今日は委員会の仕事で遅くなるから、先に帰ってて」

平然と言いのけられたあたしに拍手を送りたかった。
自分から予防線を張ってしまえばいい。

彼にこれ以上近づかないように。
彼がこれ以上近づかないように。

放課後、彼が何をしていたようがあたしには関係ない。
あたしたちは幼なじみというだけの間柄。
それ以上を求めるからいけないんだろう。

「わかった」

自分から突き放してしまえばいい。
そうすればきつと、こんなにも胸が痛むことはないはずだから。

第6話 屋上の王子様

そして文字通り。

空を見上げてうわのそら。

いつもびっしり書かれたノートも、今日は雪が降ったかのように真っ白だ。

「委員長、号令！」

カンペキだったはずの号令もタイミングを外してしまう始末。気がついたら、本日の授業は終了していた。

長かったような、短かったような本日を終えて、机に突っ伏していれば頭上に影が差す。

顔を上げなくても、なんとなく分かっていった。

案の定その手はあたしの頭に触れて、髪を撫でる。体温が上がるのが分かった。

突き放すと決めてこのざまだ。

「ゆい」

「……なに？ 触らないでよ」

彼の前で弱めることは許されない。

緩みまくっている涙腺とおなかに力を入れて体を起こせば、予想以上の至近距離に彼の顔があつて、心臓がのけぞった。

「だいじょうぶか？」

だいじょうぶじゃない。

アンタのせいで、すっかりおかしくなった。

あたしに愛想をつかしたなら、優しくなんてしないでよ。

早く、どこかあたしの知らない場所に行けばいいじゃない。

吐き出してしまいたい思いが体の中で渦を巻く。

渦は黒く大きくなって、上りつめて、はちきれんばかりだ。

「早く、帰ったら？ あたし、委員会行かなきゃ」

彼の手をはじいた。

席を立て、カバンをつかんだ。

走りたい衝動をこらえて、それでも振り返らずに教室を出た。

最悪。

「サイアク、あたし」

誰もいない廊下で、小さく涙の落ちる音がした。

委員会なんてはなからなかったし、このまま帰るにしてもあまりにも顔が悲惨だ。

ぼんやりとした歩みはいつの間にか階段を上っていて、気がつい

たときにはさびついたドアノブに手をかけていた。

鈍い軋んだ音の向こうには、傾いた太陽と寝そべる男子の姿。引き返そうと思った時にはもう遅かった。

「いいんちよー？」

オレンジ色を背負った彼は、そのキレイな顔でにやっと笑った。

屋上は彼のテリトリーだ。

そんなことも忘れるくらいぼんやりとしてしまったらしい。

そのモデルなみの体形と顔で女子に絶大な人気を誇る彼は、あたしのクライスマイトで、しかも泰斗の友達だった。

涙でぐしゃぐしゃになったあたしを見て、彼は片手をひらひらと振ってあたしを呼び寄せた。

今さら引き返すわけにもいかずその手に従えば、今度は座るようにと指が地面を指した。

いったい、彼は何様なんだか。

ぺたりと座ったコンクリートはひんやりとしていて、泣きすぎて高ぶった熱を吸い取っていく。

彼は黙って、目を伏せていた。

長いまつげがその端整な顔をより際立たせていて、何だか腹が立った。

だから、だろうか。

「あのね」

口が勝手に言葉を吐き出していたのは。

渦を巻いていた胸の黒いものが、つきつきと抜けていく。

彼は目をふせて、時折目を薄く開いて、とりとめもない話に耳を傾けてくれた。

話が終わることにはまた涙が出てきてしまつて、ごまかすように鼻をすするあたしの顔を彼はソデでぬぐってくれた。

「ごつごつ彼だから、きつと女の子に人気があるんだろう。」

涙をぬぐわれながら、そんなことを思っていた。

「いいんちよーは、たいちゃんに言うこと言つてないからそんなに苦しいんでしょ？」

「だって、そんなこといえないじゃない」

「なんで」

まっすぐ、彼があたしの目を見た。

「どうやら、本当に疑問に思っているらしい。」

「二の句がつけずにいれば、彼がゆっくりと立ち上がった。」

「俺に言えたんだから、言えるよ。それにたいちゃんは、いいんちよー命の男だから」

だから大丈夫、と後ろ向きに手を振ってくれた彼はゆっくり扉の向こうに歩いていく。

「どい、いくの？」

取り残されたあたしが彼の背中にそう投げかけると。

閉じかけた扉の隙間から答えが返ってきた。

「俺は素直だから、会いたくなったら迎えにいくんだよ」

オレンジの空に、鈍い音が響き渡った。

第7話 消えゆく ちいさなころ

ひとり残された屋上で、頭を冷やすこと一時間ちよつと。
気がついたときには夕焼けがさよならと手をふって、かわりに気
の早い白い月が夜をつれてこようとしていた。

「……かえ、ろ」

振り返ることなく屋上を後にして。
薄闇が包む階段を駆け下りた。

予定よりだいぶ遅くなってしまったせいで薄闇は本格的な夜闇に
姿を変えようとしている。

それでも、なんとなく家に帰りたくなくて足は勝手に遠回りの道
を選択してしまった。

子どものころ。

あたしがきつとまだ素直だったころ。

こつやって何度も遠回りをして帰った。
泰斗と一緒に。

普段の道より貴重に思えた。
なにかもが。

無法地帯の雑草も、知らない家の犬も、電柱も、石も、空も。

遠回りして、家に帰る時間を遅らせて。

怒られて、それでも泰斗と笑って次の日も手をつないで歩いた。

「あの頃は、もうすこし、可愛げがあったのに」

泰斗に勝つとか勝たないとか。

委員長とか優等生とか。

そんな枠組みはなくて、あたしもひとりの女のコだった。

いつから、こんなふうになってしまったんだろう。

見上げた空。

白い月は蜂蜜のような色に変わって、生ぬるい夜を甘く照らす。

迷うことなく歩くあたしの目に入ったのは、子どもの頃よく遊んだ公園だった。

「あ、れ？」

足を速めて近づけば、そこには金網と工事を知らせる看板があった。

暗闇に慣れた目を細めてそこに書いてある内容を追えば、この公園にマンションが建つ、ということが読み取れた。

遊具が少なく、ただ広いだけのこの公園。

木や茂みが多かったから、絶好の遊び場だった。

泰斗はこの公園をものすごく気に入っていて、よくふたりで遊んだものだ。

ヤツは遊びの天才で、次々と何か新しい遊びを仕入れてはいちばんにあたしに教えてくれた。

足を前に踏み出せば、金網に当たって音が響いた。

もう、昔のように入ることはできない。
金網に指をかければ、その冷たい感触が胸をも冷やしていくよう
だった。

こっぴやって、消えていく。

思い出が、小さいころの素直なあたしが。
あたしを誰よりも想ってくれた、彼が。

「やだ……」

離れていってしまっ。

なくなってしまう。

ずっとアタリマエではいられない。

冷たい金網におでこを押し付けて。

頭の中でめぐる彼の顔に、目を伏せた。

『俺に言えたんだから、言えるよ』

屋上の、彼の言葉がよみがえる。

あたしにも、言えるだろうか。

素直になって、あのころみたいに。

はなれてしまっのが怖いと。

あたしに、ちゃんと言えるだろうか。

「……………」

目を伏せて、金網に寄りかかるあたしの耳に小さな声が聞こえた。
顔を上げて、ゆっくりと前を見る。

金網の向こう側。
暗闇の中の人影。
その声は。

「たい、と？」

あたしが、いま想っていたひとのものだった。

第8話 上手な鼓動のごまかし方

金網の向こう。

黒に揺れる人影。

聞こえた声は、確かにあたしの名を呼んだ。

「ゆい！」

走りよってくるその姿は、やっぱり犬のようだった。

「なんで、こんなところに、」

「何してんだよ！ こんな遅くまで」

いいかけた言葉は、走りよってきた彼によってかき消される。

遠くからでは分からなかったその表情が、近づいたことによって見えてきた。

どうやら、怒っているらしい。

「お前な、女が夜にひとりで出歩くな！ あぶねえだろうが。そもそもお前には危機感がかけてんだよ。何かあってからじゃ遅いだろ。お前だつたらわかってんじゃねーのか、そんなことくらい。まったく、だから一緒に帰ればいいのに」

心配しているのは分かった。

だけど、最後のひとことにカチンときた。

一緒に帰ればよかったって、なんなの。
そんなこと、ヒトコトも言わなかったくせに。

飛び散った火花のせいで、勢いがついた。
気がついたときには、もう勝手に口が動き出していた。

「昨日、先に帰ったのは誰よ！ アンタじゃないの！ 帰ってくるのが遅いだなんて言われたくないわ。自分だって充分遅かったくせにっ」

夜にこんな大きな声を出して。

迷惑とか、そんな常識的なことが一切頭に無かった。

「何してたのか知らないけど、あたしに愛想つかしたのなら心配なんてしないでよ！ アンタだってひとりで帰っているんだし、あたしがひとりで帰ろうがなにしようが関係ないでしょ！」

自分で口にして、自分の言葉に痛みを受けている。

やっぱり素直になんてなれない。

いい言葉はもっと違うところにあるのに、嫌な言葉しか出てこない。

「もう、あたしにかまわ、」

「ゆい」

ノンブレスでまくし立てるあたしをさえぎる声。

目の前の金網にかけられた指が、揺らして音を響かせた。

肩で息をするあたしの正面で、泰斗が顔を押しさえている。ぼつりと、何か聞こえたけれど、それはあたしの耳までには届かなかった。

「なっ、によ！ いいたいことがあるならいいなさいよ！」

「なあ、端のほうに穴開いてるからさ、こっちこいよ」

「なんでよ」

「いいから、はやく」

泰斗が指を差した先。

たしかに人ひとり分くらい穴が金網に開いていた。

「はやく。でないと俺、どうなるかわかんねえ」

言葉の意味がまったく分からなかったけれど、あんまりにも急かすものだから言われるがままその穴に近づいた。

さっきまでの怒りと興奮は、彼の訳がわからない言葉で鎮火。

ひどいことをいったのに、そのことについてのコメントはないんだろうか。

金網に引っかからないように足を向こう側に出して。

すると、穴の向こうで泰斗が手を差し出してくれた。

しぶしぶその手につかまって、体を抜き出そうとすれば。

「ちょ、あぶなっ、ひっぱんないで、」

手に触れたとたん。

きつく握られて、力任せにひっぱられた。

勢いがついた体は前に倒れこみ、泰斗の腕の中へ。

そのまま強く抱きしめられて、息が止まるかと思った。

「やべえ、まじやべー」

顔の横で、泰斗の音がする。

なにがいったいやばいのか。

それよりも、この状態のほうがやばいと思うのはあたしだけなのだろうか。

「はな、し、てよー!」

「はいームリ。絶対ムリー。俺、もういまへブンだから。天国行きだから」

もがけばもがくほど羽交い絞めにされて。

泰斗の顔があたしの肩にうずめられて、首筋をくすぐる。

なにこれ。

熱くて、ぞわぞわする。

おかしな声がでそう。

「俺もう、絶対ひとりで帰んねーから。ゆいより遅くならないようにする。それと」

「はあ」

「後で、お前の呼吸が止まるくらいちゅーする。これ絶対な。まずはタネ明かしが先」

熱くなりすぎた頬に落とされたキスと、恥ずかしい宣言。

異論を唱えることも出来ないまま、腕を引っ張られた。

訳が分からないまま歩きはじめてた彼を小走りで追う。

いまは、とりあえず。

指の先まで響くこの心臓の音をどろどろさせてしまかしたらいいのか、
必死に考えることにした。

最終話 いつまでもキミと

「どうだ!」

手をつないで、走るようにして進んだ公園の中。

古びた遊具になつかしさを覚えていたとき、泰斗がようやく足を止めた。

彼が指差すほうには、まっすぐに伸びるイチヨウの木。

その下は、根を傷つけないように掘られた穴がたくさんあった。

「どうだ、ってなにが?」

「……お前、またかよ。ゆいは頭いいんだか悪いんだかホントわかんねえな。」

「少なくともアンタよりは頭良いつもりですけど」

憎まれ口をたたきながら、木に近づいていく。

月明かりを受けて、青々と茂る葉があわくひかって見えた。

「ホントに覚えてねーのか? ほら、この木の下で」

イチヨウの、下。

青く、ひかる葉っぱ。

暑い夏の日。

熱い泰斗の、小さな手。

その手に、持っていたものは。

「タイム、カプセル？」

「はい正解」

泰斗がしゃがみこんだそばの、穴の中。

のぞきこんでみれば、よごれたお菓子の缶が埋められていた。

「公園がなくなるって聞いて、いてもたってもいられなくてさ。昨日もずつと掘ってたんだけど見つからないのな、案外。」

つないだままの彼の手から、土の感触がした。

そういえば、昨日の夜にあたしの頬には砂が残っていた。

「これ、探してくれてたの」

「ったりまえだろ。約束したじゃねーか。オトナになったら一緒に開けようってさ。ちよつとオトナには早いけどな」

少しだけ恥ずかしそうに笑った彼が、手を伸ばして缶を取り出す。

いつまでも子どもみたいで。

バカみたいにロマンチストで。

変わらない、幼なじみ。

大きくなって、見栄やプライドに固まって素直になれなくなったあたしは、こんな大事なことを覚えていた。

「なに入れたっけなー。タカラモノって約束だったろ？」

汚いお菓子の缶は横に振られてカラカラと、乾いた音を立てる。

あの頃。

あたしがまだ素直だった子どものころ。

いちばんのタカラモノをあの中に入れた。
決してなくしてしまわないようにと。

「あたし、覚えてるよ」

「マジ？ なに入れたんだよ」

泰斗の手が、あたしから離れて缶に伸ばされた。
その指がふたを開けようとしたとき、あたしは彼の手に上から自分の手をのせた。

「……………ねえ」

土に汚れた手。

制服もすっかり黒くなってしまっている。

「いまのあたしのタカラモノ、なんだと思う」

こんなに、必死に探してくれていたなんて思わなかった。
こんなに、頑張っていたなんて知らなかった。

「そうだなー。俺、とか言ってみたり」

生ぬるい夜。

蜂蜜色した甘い月。

青くひかるイチヨウの下。

すぐ隣にいる、泰斗の顔。

彼の肩口におでこをつけた。

心臓がおかしくなってしまうくらい波打ってるけど、それすら心地いい。

「あたり」

口をついて出た言葉に、彼の肩が揺れた。

タイムカプセルの中で、あの頃あたしがいちばん大事にしていた、泰斗からもらったネックレスの音が聞こえる。

小さい頃のあたしは、泰斗からもらったものを全部たからばこにしまっていた。

ネックレスはその中でも、いちばんお気に入りのもので。

自分の恥ずかしすぎる言葉に、反応が薄いと不安に思って顔を上げれば。

まっすぐにあたしを見る、その目にぶつかった。

「窒息しても、しらねーからな」

その瞬間、あたしの目から、夜と月と青い葉が消えて、大きな影にかみつかれた。

「おとーさん、おかーさん！ 遅くなってスイマセンでした！ でも、ついに、ゆいが俺のためにヤキモチを！」

「ちよ、なんなの！？ 妬いた覚えなんてないわよ！」

「ほらほら、大きい声出すとまた立ちくらみでふらつくだろ？ た

だでさえ、酸欠なんだから」

「だれのせいだと思ってるの！？」

バカのバカみたいなお声がいつものように響き渡り。

だけど、ふらふらしたままのあたしは体に力が入らず、バカの口を閉じてやる事ができなかった。

あのおとき、一瞬でも素直になった自分を後悔したのは、いつまでもない。

最終話 いつまでもキミと（後書き）

短い連載でしたが、最後まで読んでくださって、
本当にありがとうございました！

ひとこといただければ幸いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7792c/>

恋愛競走 いつまでもキミと

2008年11月7日09時00分発行